Theater Association of KANAGAWA
TAK

# DRAMA かながわ

NO.89

Theater Association of Kanagawa　July 2023

## TAK in KAAT「雨上がりには好きだといって」Vol.1~2

## 2023年度芝居塾情報／コラム 劇団「無題」穂村一彦が描く世界／劇団探訪 クェル・ペッパー篇／資料室だより ほか

# TAK in KAAT

## 『雨上がりには好きだといって』
## Vol.1 フリューゲルの風／Vol.2 アインブラットの本

**2023年4月20日～23日　KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ**

### 【総評】文：猪熊竜久馬（虹の素）

２０１１年１月、神奈川県の文化芸術の拠点として優れた舞台芸術作品の鑑賞機会を提供することを目的に新設された神奈川芸術劇場（愛称：KAAT）。そしてその年の１２月に虹の素は旗揚げ公演を行いました。横浜で劇団活動を続けてきた私たちにとってそこは憧れの舞台のひとつでした。

２０２０年５月、劇団創立１０周年の記念公演『夜明け』を、初のTAK in KAAT で迎えるはずでした。しかし、夜が明けることはありませんでした。そこから長らく演劇界には分厚い雲が覆いかぶさっていきます。それはまだ完全に晴れてはいません。陽が当たらない大地に芽吹いたものの根を張ることはできず、太い幹さえも次々と枯れ衰えていきました。

虹の素も例外ではなく、何度も何度も折れそうになった三年間でした。それでも私たちの中でずっと心残りだった「この劇場で公演をする」という想いの火種だけは消えることなく残りつづけました。そこから再び立ち上がりこの劇場を目指して歩き、そして今回ようやく念願のTAK in KAAT を叶えることができました。

開館当初から今までずっと、TAK in KAAT という企画を守りつづけてきてくださった劇場の方々、そしてＴＡＫ（神奈川県演劇連盟）の先輩劇団の方々。沢山の方々のご尽力によって、この公演が実現できたことを、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。そのバトンを受け次の世代に渡していくためにも、私たち虹の素はこれからも頑張っていかなければいけないとより一層背筋が伸びる思いであります。

ＴＡＫには若い劇団も加盟していますが中々根付けていないのが現状です。劇団の持続は本当に困難であり、特に若者にとっては昨今の情勢もあってより一層困難であると感じています。ことあるごとに言葉にしてきてはおりますが、たくさんの方々が耕し守ってきたこの神奈川演劇の土壌を受け継ぎ次世代に継承していくことを、比較的若いメンバーが集う我々虹の素が担っていかなければいけないと強く思っております。

１２ヶ月連続公演という無謀にも思える挑戦。「無理だ」「やめた方がいい」という声も確かにありました。しかし私たち虹の素の心には、中止となった『夜明け』公演の主人公である武辺さんの信念がありました。たった一人でガーナの地へ赴き、貧困にあえぐ村にパイナップル畑をつくった青年。彼の遺した「意志あるところ、道は通じる」という言葉は、私たちを励まし続けてくれました。

この『雨上がりには好きだといって』シリーズは、架空の高校を舞台にした閉校までの一年間の物語です。失敗を恐れず我武者羅に無我夢中に走ってきた青春時代。小さな悩みも鬱屈とした想いもたくさん抱えた十代。誰しもが通ってきた時代。色んなことを忘れて少しずつ大人になってきた今。ほんの少し想い出して、立ち還って、そしてまた今を精一杯の力で歩いていくための物語です。

三年前、１０周年という節目を迎えるための目標の地、いわばKAATはひとつのゴールでした。ですが今は違います。１２ヶ月連続公演という大冒険の「スタート」です。

ここから始まっていく。ここから始めていくんだ。という強い決意のもとで、私たちはこの連続公演の開幕を迎える事が出来ました。「神奈川にこんなにがんばってる若い劇団があるぞ」とより一層注目していただけるよう、これからも歩き続けていきたいと思います。

# 劇評　TAK in KAAT『雨上がりには好きだといって』 Vol.1 フリューゲルの風／Vol.2 アインブラットの本

ついに始まった、虹の素による１２ヶ月連続公演。その第一弾と第二弾がKAAT大スタジオにて二本立てで上演された。

前号でこの連続公演に挑む劇団員たちのインタビューを掲載した。聞き手を務めさせていただいた私も彼らの熱意を十二分に感じていたため、その公演を楽しみにしていた。虹の素はコロナ禍によってTAK in KAAT の公演が中止になった苦い過去がある。今回は満を持しての公演となった。

『雨上がりには好きだといって』は横浜にある架空の高校「県立横南高校」を舞台に、廃校前最後の一年を描く連作青春群像劇だ。この作品は２０１３年に初演され、それ以降シリーズ化して各月をテーマにした作品が出そろったため、月ごとに並べた連続公演という形になっている。２０２３年４月～２０２４年３月まで毎月公演を行い、俳優は一年を通して同じ役を演じる。

開演前に虹の素・主宰である猪熊竜久馬さんのあいさつから始まり、劇団員による前説、そして入場セレモニーが行われた。これから始まる１２ヶ月の旅の前に、その登場人物たちの「お披露目」の式である。希望と緊張が入り交じりながらも、全員が晴れやかな表情をしていたのが印象深い。

第一弾「フリューゲルの風」は横南高校サッカー部を舞台にした作品。先輩が卒業し、中心選手となる四人の部員たちと、彼らを取り巻く家族、先輩たちやカフェのマスターとの交流が、切なく時にファンタジックに描かれる。

第二弾「アインブラットの本」。学校生活の中であまり日の目を見ない図書委員会。その委員となった様々なキャラクターの生徒たちが、図書室で過ごす日常の中で変化していくそれぞれの心情が描かれる。

どちらの作品も登場人物のキャラクター設定をはっきりとさせていて、「横南高校」の生徒たちのバラエティ豊かな個性を際立たせる作り手の意思を感じた。舞台装置もKAAT大スタジオに相応しい、大がかりながらもよく練られている美術だった。そして終演後には次回作の予告編が上演される。楽しく、コミカルな予告編に次作への期待値が上がる。

虹の素、十年の集大成と言える１２ヶ月連続公演。今作では経験不足からくる稚拙な部分も散見されたが、そんなことはこの公演では重要ではないのかもしれない。来年３月「横南高校」は廃校となる。この期間に「横南高校」の生徒たちがどう変わっていくのかを見てみたい。完結編では俳優たちの顔は入場式の表情と変わっているはずだ。劇中の役のみならず、演じている若者たちがどう成長していくのか、そして作り手側はどう変わっていくのか・・・。

作品と同時に、彼らの青春の帰結を見届けることができるのがこの12か月連続公演の大きな魅力だ。

文：中山朋文（theater 045 syndicate）

虹の素『雨上がりには好きだといって』
１２ヶ月連続公演

Vol.1 March フリューゲルの風（2023年4月）
Vol.2 April アインブラットの本（2023年4月）
Vol.3 May リヒトの色（2023年5月）
Vol.4 June オルテンシアの種（2023年6月）
Vol.5 July ダーフォの国（2023年7月）
Vol.6 August オリキュレールの糸（2023年8月）
Vol.7 September シンの月（2023年9月）
Vol.8 October ユウェルの箱（2023年10月）
Vol.9 November ノウェンの音（2023年11月）
Vol.10 December レインディアの鼻（2023年12月）
Vol.11 January ヴィティの声（2024年1月）
Vol.12 February トレプタティの道（2024年2月）
Vol.13 完結編（2024年3月）

# 2023年度芝居塾情報

■今年度よりＴＡＫの単独公演となった芝居塾。演劇未経験者や経験の少ない方々にＴＡＫ加盟団体の劇団員と一緒に公演を作り上げていくことに重点を置いています。新たな演劇人を育成することで、神奈川県下の演劇人口の増加へと昇華することが期待できる。これが当企画の意図となります。将来的には芝居塾をいくつかのコースに分けて行う案があり、その一つとして今回は「ビギナークラス」を開催。担当劇団は G/9-Project。１５歳から２９歳までの青少年をターゲットに４月より募集を行い、結果５名の塾生が集まりました。

５月の開塾式から８月の公演までの３ヶ月間を劇団員とともに行動する塾生たち。公演１ヶ月前に迫った某日、稽古場にお邪魔してインタビューを行いました。

聞き手：オッスたかのり（劇団かに座）

**－今回の公演のタイトルとその由来を教えてください**

**横山銀芽（G/9-Project 座長）**：１９００年アメリカで出版された児童文学作品「オズの魔法使い」を題材にしました。そこに日本の昔話である３人の太郎（桃太郎・金太郎・浦島太郎）を合わせたら面白いんじゃないか。この発想から今回の作品が生まれました。

**－脚本・演出はどなたに？**

横山：当劇団では珍しく脚本と演出が別となります。脚本は仲尾玲二(G/9-Project）、演出は和泉さな氏（日本演出者協会会員）が担当します。

**－見どころを教えてください**

横山：過去の合同公演でも行っている他ジャンルとのミックス企画がヒントになっています。今回は海外と日本の作品のミックスとなりますが、それ以外にも「泣いた赤鬼」や他の作品のエッセンスを加えていたり、「違う作品のここがこう繋がるのか」「このキャラクターがこの立場になるのか」といった驚きもあると思います。塾生にはかなりメインの役を与えています。また昨年度の塾生や過去の合同公演に参加したメンバーも敵役として出演したりします。

**－敵役がいるということはアクションシーンがありますね？**

横山：はい。笑いあり・涙あり・ハラハラありです。アクションシーンのほかに歌とダンスもやります。とてもエネルギッシュな作品に仕上がってきていますので楽しみにしてください。

**－稽古の様子はどんな感じですか？**

横山：当初、塾生は基本的に週末の昼間、劇団員や客演の方々は夜間を中心に稽古を行っていました。しかし最近は昼夜関係なくミックスされてきています。塾生も率先して夜に参加したりと。学業で忙しい塾生も勉強の合間を縫って頑張っています。衣装もみんなで意見を出し合いながら自分たちで作っています。役者だけでなく裏方も学ぶ、これが芝居塾の重要なコンセプトだと感じています。

■座長の言葉を真剣に聞きながら時折うなずく塾生たち。やる気に満ちたオーラがビシバシ伝わってきました。

塾生５名にもインタビューを行い、芝居塾に懸ける意気込みをそれぞれ聞いてみました。

**岡本樹希（芝居塾2023塾生）**：演劇を通じて知り合った方から声をかけて頂き芝居塾に参加することになりました。自分自身、演劇の経験はある程度蓄積されていると自負しており、台本を通して色々なことを任されて頂いてると感じました。塾生全員に大役が与えられたことに最初はプレッシャーを感じましたが、「初めまして」で出会った五人が一緒になって作り上げていくことにワクワクしました。殺陣が好きなので　殺陣中心とも言える役を頂けたのは嬉しいです。皆さんぜひ殺陣にも注目してください。

**波多野瑛都（芝居塾2023塾生）**：高校生です。まったく演劇経験がなく、小さいころから特に演劇が好きだったわけでもありませんでした。しかし部活で放送部に入り、朗読をはじめ「人前で話すこと」にハマりました。結果的に県大会で一位を取り、全国大会にも出場しました。朗読の練習の一環として演劇を観る機会も多く、演劇と朗読との相違点を発見していく中で、次第に演劇を観る側から観せる側に回ってみたい思いが強くなってきました。芝居塾の稽古を通して今までやってきた朗読からワンランク進化できたと感じており、将来の選択肢の一つに繋がっていると感じています。

**神戸美雪（芝居塾2023塾生）**：もともと高校で演劇をやっていたのとスタッフに知り合いがいることもあり、今回の芝居塾に参加しました。塾生５人は本当に全員仲が良く…（間）。え？仲いいよね？
全員：あ、はい（笑）。
オッス：あれ？大丈夫かな（笑）？
神戸：はい！仲が良くて（笑）。あと団員の皆様もすごく優しくて稽古に行くのが毎回楽しいです。公演を観に来て頂けるお客様にも、楽しさが伝わるお芝居を観せたいです。

**天乃萌（芝居塾2023塾生）**：横浜に引っ越して来たのが今年の３月で、地元ではもともと演劇には携わっていました。横浜で演劇が出来る場所を探している中で芝居塾を知り「どんな人が入ってきてもいい」という入口の広さもあり参加を決めました。皆様の優しい雰囲気もあって馴染むのは早かったです。入塾から３ヶ月しか期間がないのは今となってはとても寂しく感じています。キャリアや経験が違うメンバーが集まり、「あなただったらこの時どう思うか」など、シーン毎の感情を話し合いながら一つの物語を作っていくのはとても楽しいです。たくさんの方に公演を観て頂きたいし、メッセージ性のあるストーリーなので特に同年代には刺さると思います。

**モルタル鈴木（芝居塾2023塾生）**：「どんな人でも入れる」というコンセプトの芝居塾。その「どんな人」にあたるのが自分だと思っています。演劇については観劇も含めまったくの未経験で、すべてのことが新鮮に映る毎日です。団員や客演の皆様、そして同じ塾生から多くのことを学んでいます。ゼロからイチにしていく過程や、失敗と成功を繰り返しながら、作品とともに成長している自分に嬉しく感じてきています。芝居塾を通して人と人との繋がりやみんなで集まって一つの作品を作り上げる喜びを知りました。

■とても真剣に、とても熱く語ってくれた塾生たち。インタビュー中の表情に若干の緊張は感じたものの、終始和やかに行われました。全員ハキハキとした口調だったことも印象的。
　全員のインタビューが終わったころ、劇団員の大狼さんがやってきました。これは話を聞くチャンスだ！ということで急遽突撃インタビュー。

**- 塾生の皆さんはどうですか？**

**大狼羊（G/9プロジェクト事務所）**：みんな真面目でいい子たちばかり。芝居を学びたいという意欲が高く、座学を行ったときの眼差しもすごく真剣で、初心にかえる大切さを感じました。塾生から学ぶこともたくさんあり、純粋に芝居を楽しむ姿勢はうらやましくもあります。ともに素敵な舞台を作っていきましょう！

■温かく見守る口調で語ってくれた大狼さん。ありがとうございました。そして大狼さんと塾生たちは稽古場の奥にあるキッチンに。どうやら夜の稽古に向けた夕食を作るようです。ともに食事を作る。なるほどこれも芝居塾の一環なのですね。そこへまた一人、作間さんが合流しました。

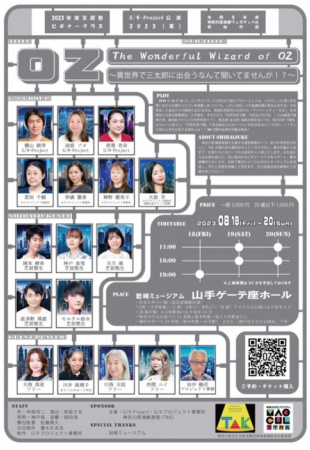
**- これからみんなで夕食を作るのですね？**

**作間ユイ（客演）**：いえ、作るのは大狼さんです。私は味見担当です（笑）。

---

**G/9-Project公演2023【夏】**
**芝居塾～ビギナークラス～**
**『OZ～異世界で三太郎に出会うなんて聞いてませんが！？～』**

開催日　2023年8月18日(金)19:00、19日(土)11:00／16:00、
　　20日(日)11:00／16:00
会場　　山手ゲーテ座ホール
入場料　一般3,000円、20歳以下1,000円
チケット予約・購入ページ
　https://www.g9-project.com/oz



# コラム 劇団「無題」穂村一彦が描く世界

劇団「無題」で団長を務める穂村一彦は、公演用の脚本を書きながらＷＥＢ上（個人サイトなど）でも脚本を載せており、全国津々浦々から上演依頼が舞い込んできている。その数は年間百件にも上り、高校演劇を経験した人間ならばその名を聞いたことがある者も多いのではないだろうか。その中から今回は二本の脚本を紹介する。

**■「劇団ゲキヤクへようこそ！」**

第２０回かながわ演劇博覧会で上演した作品。ヤクザの一人娘と劇団の団長という二つの顔を持つ主人公を中心に、劇団の本番公演に向けて個性豊かな登場人物たちが右往左往する舞台裏ドタバタコメディは、演劇あるあるを描きながらも舞台経験のない人が観ても「舞台に立ってみたい」「自分でも舞台に立てるかもしれない」と思わせる魅力がある。

本編にも登場しているが、最初演劇に全く関心のなかった人物が演劇の魅力に気付き、最終的に劇団へ入団を決めている。彼らがなぜ演劇を始めようと思ったのか。「団員たちで即興劇をして未完成の脚本を完成させる」という、演劇を経験している者の中でも躊躇う人がままいるような展開にはなっているが、台詞が決まっていないからこそ思い思いの芝居を自由に演じることができた。そして最終的に演劇の魅力の一つでもある「なりたい自分になれる」を実感したからだ。

そこには高尚な演出や大袈裟な演技などは必要ない。本来の自分が求めている「なりたい自分」にただ従った結果、自由と喜びと楽しさを得ることができる。ゲキヤクはそういった「演劇を作ることの楽しさ」をギュッと詰め込んだ、いわば演劇入門書のような脚本だと感じた。

この脚本に限らず彼の書く脚本に共通していることが、舞台で台詞として発さなくても、ただ脚本を声に出して読むだけで面白さが伝わるという点だ。どんな人がやっても面白い舞台になる点が、「演劇」のハードルを良い意味でぐっと下げてくれている。

**■「戦国ＳＮＳ時代」**

近年はコメディ脚本を書くことが多いが、社会的なメッセージも込められたシリアスな脚本も書くこともある。第１８回かながわ演劇博覧会で上演したこの作品は、度々ニュースでも取り上げられる「ＳＮＳ上での過激な炎上・誹謗中傷」がテーマとなっている。

この作品はその名の通り「戦国時代にＳＮＳがあったら」というifの設定で話が進んでいく。武士や武器、兵糧の数ではなく、ＳＮＳのフォロワーや「いいね」の数で武士の価値が決まるという一見突飛でまさしくコメディにありがちな世界観だが、蓋を開ければそこには現代社会の根深い闇が描かれている。

日本人のほとんどがＳＮＳアカウントを一つまたはそれ以上持っていることが当たり前である現代において、ＳＮＳ上でバッシングされることはそのまま現実世界にも直結する。

主人公の明智光秀はＳＮＳに疎かったが、主君である織田信長の信頼を得るためにＳＮＳ上での活動に邁進していた。しかしなかなかうまくいかず、ＳＮＳを使いこなすライバルの豊臣秀吉に先を越され、織田信長からは呆れられる日々。そんな中で見つけた唯一の味方がＳＮＳの住人だった。インターネットの発達によって日陰で生きてきた者にも突如スポットライトが当たってしまう。ずっと変わらず同じ場所にいたはずなのに、自身を取り巻く世界だけが急速に変わっていく。そんなＳＮＳに翻弄されていく明智もやがて暴走していき、作られた世界の「いいね」に視界を遮られ、実際に目の前にいる大切な人の言葉を受け入れることができず、そうして迎えた結末は現代でもよく見かける光景であった。

ネット上の情報や意見に踊らされず、自分にとって本当に大事な人や居場所が何なのかを忘れずにいられれば、まさにＳＮＳの戦国時代と言っても過言ではない現代を強く生き抜いていけるだろう。そんなことを思わせる、メッセージ性の強い作品だ。

上記２作品はいずれも穂村一彦個人サイト、および、脚本登録＆公開サイト「はりこのトラの穴」にて無料公開されている。演劇経験者だけでなく、これから演劇を始めてみたい人にもぜひ読んでほしい。もちろん、まだ始めたいという気持ちに至っていない人にもおすすめだ。

そして主催している劇団「無題」は８月に第２７回目の本公演を行う。夏らしい爽やかな妖怪コメディとなっているので、穂村一彦作品に少しでも興味の湧いた方はぜひ足を運んで欲しい。

文：マリー（劇団「無題」）

---

**劇団「無題」第27回公演『もしもし！こちら妖怪支援課です！』**

開催日　2023年8月26日(土)13:00／17:00、
　　27日(日)12:00／16:00
会場　　STスポット横浜
入場料　前売1,500円／当日2,000円
公演詳細ページ
https://gekidan6mudai1.amebaownd.com/pages/4819694/page_201603151456

公演詳細

# 劇団探訪 クェル・ペッパー 篇

**■劇団紹介**
【団体名】クェル・ペッパー
【代表】坪井俊樹
【メンバー】藤岡至央、coz
【神奈川県演劇連盟加盟】2023年4月

**■劇団名の由来**
メンバーの藤岡が好きなうずら（クェル、英語表記:quail）の卵と、coz の好きなドクターペッパーを合わせ「クェル・ペッパー」と命名しました。

**■設立した経緯**
演劇を含めた芸術関係のイベントは、近年のコロナ禍もあり配信という形態で表現される機会が増えてきました。専門学校時代から一緒に仕事をしてきたメンバーと話をしていたとき、「いっそのこと映像と演劇に特化してるチームを作っちゃおう！」という話で盛り上がりました。それがキッカケで、いわば「ノリ」で設立しました。

**■団体（メンバー）について**
坪井・藤岡・coz の３人は全員腰が重いです。自分達からは発信することはあまりありませんが、基本的にノリはいいです。面白そうなことにはどんどん首を突っ込みます。動画配信やＤＶＤ制作、ＯＰ映像、ビジュアルデザインなども専門的に行っていますので、ご依頼がありましたらぜひご連絡ください。
また坪井は「劇団スクランブル」という劇団もやっています。主宰として多くの作品を手掛けていますので、脚本・演出のご依頼もお待ちしております！

※ワタリダロケットとミユキーズ　プロデュース公演ＶＯＬ．１『うれてるものにごあいさつ』（２０１８年９月）
坪井俊樹が脚本・演出として参画。
－当時のＷＥＢ記事からコメント引用
「出演者はほとんどが自分より年上なので“高齢者のラブ・コメディ”をテーマに書き下ろしました。大の大人が必死に恋愛をしている姿って、見苦しくて面白いと思いませんか（笑）。家族関係や病気、死などはどこでも取り上げるテーマなので、それらは一切抜きにして、ある意味“何も起こらない”芝居を目指しました。なので、何も持ち帰っていただくものはありませんが、単純に『面白かったぁ～』と言って帰っていただけると思います」

**■演劇連盟に加盟したキッカケ**
飲み友達であり仕事仲間である緑慎一郎氏（演劇プロデュース『螺旋階段』主宰）に口説かれて加盟しました。

**■劇団の目標**
「日々楽しく、日々一所懸命」を目標としています。設立したばかりで今後の公演情報は今のところありませんが、クェル・ペッパーをどうぞよろしくお願いします。

---

主宰：坪井俊樹は、今年６月に行われた２０２３年度神奈川県演劇連盟の総会で事務局次長に着任しました。連盟の事業には、団体として連盟に加盟する前から携わっており、その一つに「マグカルシアター」があります。
ここで総会で報告した活動内容と併せて、マグカルシアターの紹介を致します。

**■マグカルシアターとは**
神奈川県立青少年センターで行われるマグネット・カルチャー（マグカル）の一環として、未来のライブパフォーマンスを創造する若手舞台芸術人材の発掘と育成を目指す取組です。マグカルシアターに採用された団体は、公演会場として「スタジオＨＩＫＡＲＩ」または「かながわアートホール」を無料で利用できます（付帯設備込み）。また青少年センター３階にある研修室を、平日夜間の稽古場として無料での利用が可能となります。

**■マグカルシアター運営について（総会での活動報告）**
新型コロナウイルスの影響はまだまだ油断なりませんが、出演団体・ご来場者の空気感は徐々に戻ってきていると感じました。昨今はチケットの事前決済やアンケート・パンフレットのＷＥＢ化など、集客や宣伝にデジタルを駆使した方法を取る団体が増えてきました。
デジタル化と共に増えてきているのがコンプライアンスの規制です。出演する団体をサポートする立場である我々も、理解と受け入れを強化する必要があると感じています。マグカルシアターの目的として掲げている「若者たちが自らの才能や可能性を引き出し発信する場」を提供するためにも、新しいものは積極的に取り込み吸収し応用しなければなりません。若者も年長者も歩み寄り、互いに理解しあうことが大事だと感じました。
今後はマグカルシアターを神奈川の演劇のブランドとして更に定着させ、新型コロナウイルスが発生する以前よりも活気づくよう活動していきたいと思います。

※マグカルシアターでは、令和６年度の出演団体のを現在募集しています（公演期間：２０２４年４月～２０２５年３月）。詳しくは下記サイトをご覧ください。
https://www.pref.kanagawa.jp/docs/yi4/theatre/2024/boshu.html

出演者募集

# 資料室だより

**【演劇資料室からオススメの一冊】**
**「演劇入門　邪馬台国の謎」（作：つかこうへい　白水社刊）**

演劇資料室の蔵書のほぼ半分を占めるのが、戯曲と脚本集である。これは、中学生や高校生など若い世代で演劇を学ぼうとする皆さんにとってはまさに宝庫だ。しかし注目してほしいのは、残りの半分ほどを占める小説やエッセイのコーナー。戯曲や評論、演劇論などを探すついでに、ゆっくり閲覧してみることをお勧めする。ステキな出会いに感謝したくなるような面白い作品がたくさんある。今回はそんな中から絶対面白い一冊をご紹介しよう。作者の弁を真似てみれば「これ読まねえ奴は人生の半分を損してるぜ！書いた俺が言うんだから間違いねえ」という感じのつかのつぶやきが聞こえてきそうな気がする作品なのだ。

物語の主人公は、埼玉県のとある高校の演劇部顧問の国語科教師：市川昭介（同名の作曲家がいたけど）。ひょんな巡り合わせから、劇作家のつかこうへいにインタビューする羽目になる。さらにつかの豪邸（そんな家に住んでみてえなあ、でも実際はそんなことはないよ、というつかの願望が生んだ妄想だろう）を訪問して、トイレを借用した際になんと水洗タンクの中に隠されたクルーガーランド金貨を発見してしまう。一枚で百万円以上するのだ。そこに何の脈絡もなく謎の老婆が登場し叫ぶ。「邪馬台国から手を引け！」と。さらに話は進んで、あろうことか、つかこうへいが自分の学校に講演に来るという。参加する女子生徒はすべてレオタード着用が条件。もう無茶苦茶なのである。ここまで半分ほどを読んでハタと気づいた。演劇入門って？邪馬台国はどうなる？そう、タイトルから想定されるエピソードが出て来ない。しかし本文記事を書いている明晰な筆者は気付く。教師市川が繰り出す質問に答えるつかの言葉の中に、演劇とか舞台創り、役者とはいかにあるべきかなど、つか流の解釈が散りばめられていることに。毒を含んだ言葉の中に、つか流演劇論が透けて見えてくる。うーむ侮れないぞ。

そして次の問題、邪馬台国である。その後の進展は？と思いきや、三分の二ほど読み進んだところでつかが叫ぶ。「明朝七時の便で九州に飛ぶぞ。邪馬台国探しだ！」それは突然に始まる。展開は例の如くつか流のドタバタスピーディ。宮崎から大分にかけて張り巡らされた邪馬台国伝説を辿りながら、さながらつかの舞台のごとき展開をみせつつ阿蘇のクライマックスへと向かう。邪馬台国の歴史的ルーツを辿りつつ、九州人の心に根差す邪馬台国愛が浮き彫りになるのだ。そして、クライマックスでのつかのつぶやき「オレは役者というものに夢を持っているんだよ。演劇人である自分もまた夢を持っている。卑弥呼の時代からたかが千五百年。この九州のどこかに卑弥呼の血を引いた女がいる。見つけねえと芝居の幕は開かねんだ。」これを言いたかったんだろう。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

## 演劇資料室

**【開室時間】**
**平日（火曜～金曜）　13:00～22:00（貸出は21:30まで）**
**土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）**
**【休室日】**
**月曜、年末年始**
※上記以外にも休室日がございます。ホームページをご確認の上、お越しください。
**〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘9-1　神奈川県立青少年センター2階　演劇資料室　電話：045-286-4485**

## 今後の事業・公演予定

■2023年度芝居塾ビギナークラス G/9-Project『OZ～異世界で三太郎に会うなんて聞いてませんが！？～』
2023/8/18～20、山手ゲーテ座ホール
■劇団河童座『ブレーメンの音楽隊』2023/8/19～20、横須賀市立青少年会館3Fホール
■TAK in KAAT 演劇プロデュース『螺旋階段』『血の底』2023/8/24～27、KAAT神奈川芸術劇場(大スタジオ)
■劇団「無題」『もしもし！こちら妖怪支援課です！』2023/8/26～27、STスポット横浜
■虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.6オリキュレールの糸　2023/8/26～27、あーすぷらざ
■ヨルノハテの劇場『オオカミだ！-『3びきのこぶた』に出てくるオレの話-』2023/9/7～10、下北沢ザ・スズナリ
■虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.7シンの月　2023/9/16～17、山手ゲーテ座ホール
■虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.8ユウェルの箱　2023/10/21～22、関内ホール・小ホール
■虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.9ノウェンの音　2023/11/10～12、スペース・オルタ
■虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.10レインディアの鼻　2023/12/23～24、みどりアートパーク

## 神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』　■クェル・ペッパー　■京浜協同劇団　■劇団蒼い群　■劇団河童座　■劇団砂からマカロン
■劇団820製作所　■劇団「無題」　■劇団横濱にゅうくりあ　■theater 045 syndicate　■G/9-Project　■虹の素
■プラスティックな月　■マシュマロ･ウェーブ　■まりこ☆みゅーじあむ　■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
■横浜小劇場（横浜演劇研究所附属）　■ヨルノハテの劇場


**DRAMAかながわ 89号**
**[発行] 神奈川県演劇連盟（2023年7月31日）**
**[編集] オッスたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、中山朋文（theater 045 syndicate）**
**[ホームページ] http://kenenren.org/**


ホームページ